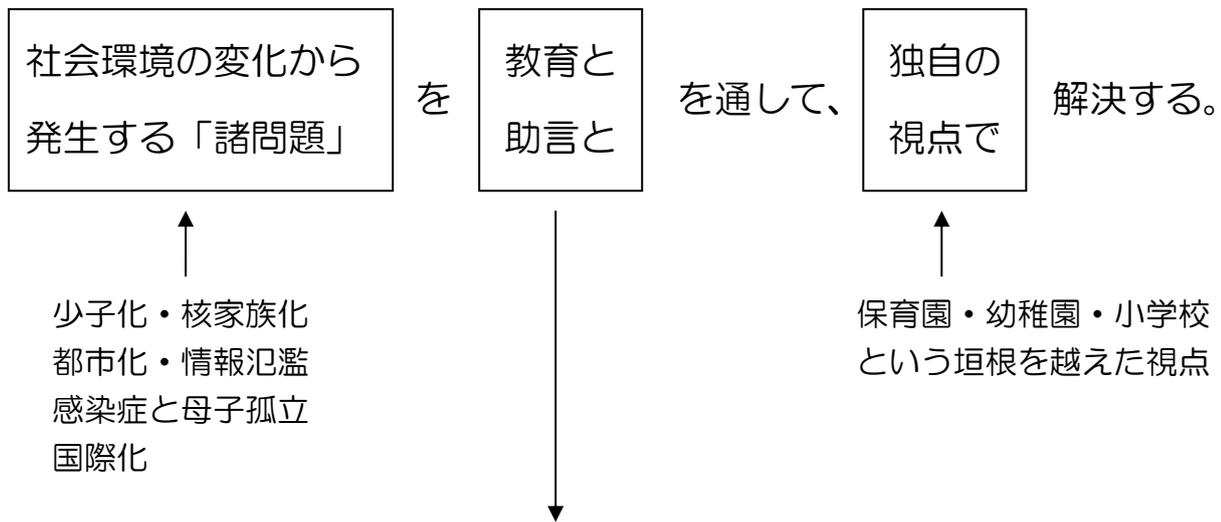


自 令和4年4月 1日

至 令和5年3月 31日

令和4年度 事業報告書



1. 教育事業（教育実践を通して）

- (1) 人と関わる力の育成（幼児とその親）…………… 2
- (2) 考える力の向上（幼児・児童）…………… 4
- (3) 体を動かす力の習得（幼児・児童）…………… 5

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

- (1) 育児・教育に関する相談と助言…………… 7
- (2) 実践研究とその成果の公開…………… 7

3. その他（地域社会への還元）

- (1) 文化的活動の「場」の提供…………… 8
- (2) 震災時に避難する「場」の提供…………… 8

1. 教育事業（教育実践を通して）

前記スタンスに基づき、下記のような教室を設置し、社会的諸問題の解決に当たった。

（参加人数は最多在籍月の数値）

（1）人と関わる力を育成する教育

公益目的支出事業①

■はじめての教室（対象：2歳～3歳の幼児とその親）

【内容】 他の親子と継続的に関わりあう「場」を設定し、広々とした環境の中でクラス担任のリードの下、幼児には遊びを通して社会性を身につけさせ、親には適宜、アドバイスをしたり勉強会を開催したりしながら子育てに関する不安を解消させる。

【結果】 今年度は、1歳の募集を見送ったため、2歳児・3歳児コースの親子が上記のねらいに沿って活動に参加した。

「コロナ」3年目となった今年度だが、これまでの経験と蓄積したデータなどから、検温・消毒・三密の回避などの対応が円滑化したこと。また、保護者に適宜ご協力を仰いできたことで、ほぼ通常の保育を実施することができた。

コロナ以前は、「運動会」や「クリスマス会」など、年齢(コース)枠を超えた活動も存在し、それら縦割り保育ならではの特徴である年齢差による「成長の違い」を感じることができた。また、行事によっては見学人数の制限がなかったため、祖父母を含めた多くの親族が参加し、好評を得ていたが、コロナ以降は密を避けるため、クラス単位の活動が中心となり、見学人数も制限されてしまった。そこで、規模を縮小することで、より「個」に焦点が当たりやすいように行事を改編した結果、保護者は我が子が躍動する場面（集団の中で我が子が頑張っている姿）に間近で接することができた。そして、それは子の成長を実感することに繋がり、子育てに対する自信を深めさせることができた。

今年度も感染拡大防止の観点から1日1クラスのみ休校したが、それ以外は休校もなくコロナ以前の保育日数を確保できた。1年を振り返ると、これまでの我々の経験と保護者の協力により、コロナに対して3年目の知恵とも言うべきものを築き上げることができた。今後、新たな公衆衛生上の問題が発生した場合でも十分に対応できという「自信」に繋がったと言えよう。

《 1 歳児コース 》

館内の人的密度を下げて感染防止を図る、人手不足による職員の多忙化を防ぎ保育の安全を図る趣旨から、当年度は1歳児コースの募集を見送った。

《 2 歳児コース 》

親から離れての活動になり、可能な限り自分のことは自分で行う姿勢が身につくとともに、集団の中での一員という意識を芽生えさせることができた。

《 3 歳児コース 》

これまでの活動経験から指導者の指示にしっかり従う姿勢が育まれたこと、さらに集団での遊びや共同作業を多く体験することで、他者と力を合わせたり他者を思いやったりする「共同」の心も育てることができた。

参加者 67 組

内 訳 2 歳児 46 組 (週 2 回 年 74 回の保育)

(週 3 回 年 102 回の保育)

3 歳児 21 組 (週 4 回 年 141 回の保育)

保護者に対する指導 2・3 歳児保護者対象に年 3 回の育児講座。

希望する保護者に対する個別のカウンセリング。

2 歳児コース



3 歳児コース



(2) 考える力を向上させる教育

■言語力UP教室（対象：3歳～5歳の幼児）

【内容】 将来、論理的思考ができる人間に育てるため、「幼児なりに」筋道を立てて物ごとを考える経験をさせておく。

【結果】 今年度も「見る力」「聞く力」「考える力」「話す力」の育成を目指し学齢ごとに様々な切り口から授業を行ってきた。年長児においては、特に「わかりやすく話す」ということに力を置いて指導した。「自然災害の多い日本に適した住まいを考える」というテーマでは、台風の風雨にも耐えられるよう、地下に深く穴を掘り、風や雨の影響を受けずに暮らせる住宅を提案したり、大地震を想定し、地中深くまで打ち込んだ柱を無数に備える住宅を提案したりと、年長児なりに状況を捉えて工作用紙に各自が提案した住宅をスケッチ。その図を示しながら授業のまとめとして全員に向けて発表する場面では、地下深く掘って建てる理由を「強い風が吹いても木の根っこのように深く埋まっていれば倒れないから。」、相当数の柱を有して建てる理由を「積み木で作るお城でも材料(積み木)をたくさん使った方が頑丈にできたから。」などと、具体的な例を出して分かりやすく説明したり、質問に答えたりできた。

参加者 幼児 57人

内 訳 3歳 29人 (週1回・年35回+言語力診断各1日+夏季特別授業1日)

4歳 20人 (週1回・年35回+言語力診断各1日+夏季特別授業1日)

5歳 8人 (週1回・年35回+言語力診断各1日+夏季特別授業1日)

「図を使って分かりやすく説明」



言語力UP教室(年長)

「空気を集めるには」



夏季特別授業(年少)

■学習力UP教室・夏季学習教室（対象：小学生）

【内容】 学ぶ喜びを感じ、自信がもてるよう、基礎学力の定着を中心に確実な学力の底上げを図った。基礎学力の充実は学習意欲の素となり、さらに内容を深めた発展的・応用的な学習に向かうためのエネルギー源となる。それを個に合わせて育てるために、常設教室では教師1人に対し子ども1人または2人で、夏季教室では1学年6、7人という小グループでの授業を行なった。

【結果】 基本的な学力が定着し、予習を踏まえて授業に臨むなど自主的な学習意欲が身についた。

また、夏季教室は1クラス6～7人で実施したことにより、意見や質問を意識して出し合うことで、相互間の集団思考が働き、小グループならではの学習成果が得られた。

参加者 常設教室 小学生7人（週1回・年35回）
夏季教室 小学生25人（夏休み6日間集中）



夏季学習教室(1年生)



夏季学習教室(2年生)

(3) 体を動かす力を習得させる教育

■体育教室（対象：2歳児～児童）

【内容】 幼児には、歩く・走る・投げる・回るなどの基本的な体の動きが「満遍なく」できるようにし、「体を動かすことの楽しさ」を幼児期に覚えさせる。

児童には、自分の体を操る基本的能力を「いろいろな運動」を通して身につけさせ、運動に対する「苦手意識」を持たせないようにする。

【結果】 幼児の習い事としては相変わらず水泳教室が人気である。また、小学生の男子では従来のサッカーや野球に加えラグビーやスケートボードが、女子はバレエに加えアイススケートや新体操などの「種目」に人気

集中しているようだ。しかし、これら種目への専門化は、ともすれば偏った運動能力を育てやすいとも言えよう。

そのため当教室では幼児には「全て」の運動に繋がる基礎的な動きをスモールステップで段階を踏みながら習得させ、小学生には特に器械体操に重点を置いて体を練るための基本的な能力を育んだ。その結果、小学校の高学年や中学に進んだ時、さまざまな種目に取り組む際、自信を持って対峙、習得できるようになったという声が寄せられた。

参加者 幼児(2歳)28人 (週1回・年間32回+夏季集中授業4日間集中)
(3歳~5歳)92人 (週1回・年間35回+夏季集中授業4日間集中)
小学生 34人 (週1回・年間35回+夏季集中授業6日間集中)



体育教室(小学生)



体育教室(年長)

■剣道教室 (対象：小学生・中学生)

【内容】 剣道を通して心身ともに自己を強く逞しくする。

【結果】 厳しい指導をすると親からクレームが来るような時代になったが、当教室で、剣道を通して「与えられた課題に全力で取り組む」ことを保護者の理解を踏まえたうえ、敢えて子ども達に厳しさを求めている。その厳しさに逃げずに立ち向かう子どもも増え、最近では上達を望み稽古前に来て練習する姿が当たり前になった

参加者 小学生 10名 (週1回・年35回)
中学生 2名



剣道教室(小学6年・5年)



剣道教室(小学6年・中学3年)

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

（1）育児・教育に関する相談および助言

公益目的支出事業②－1

【内容】 以下のような形で育児や教育に関する相談を受ける。

- ①前記教室に参加する親からの相談を随時受ける。（公益目的支出事業①で対応）
- ②教室に通えない親の電話相談や来訪相談等にも応じる。

【結果】 ①に関しては2～4歳児の保護者から延べ187件の相談があった。相談の多くは子どもの特性と幼稚園に関わるものであった。②に関してはコロナ禍であったが65件の相談があった。相談内容としては就園前に幼児の社会性を育むには家でどう接すればよいかについての相談であった。

（2）実践研究とその成果の公開

公益目的支出事業②－2

①帰国外国人児童生徒教育の支援

【内容】 日本語力が不十分な児童生徒の言語習得、教科学習フォローの仕方について、小中学校等の教員、ボランティア団体指導者の研修をする。日本語指導を要する児童生徒が令和3年の調査で6万人ちかくになり、コロナ禍にもかかわらず3年前の調査より7000人増えている。そのような状況下で、今まで先進的な研究と実践をしてきた当財団の知見を提供することは依然として重要だと認識している。

【結果】 今年度も講演の依頼があったが、コロナ禍のため県境を超えず東京都教職員研修センターの依頼のみを受け付け、100名ほどの小中高等学校等の教員に具体的な指導法の講義を行った。しかし、後述するように研修に参加する教員の資質や学校の取り組みは比較的良いものであり、研修に参加していない地域の学校の本教育に対する関心・意識の低さが問題視される。

また、教員不足により多くの指導者を非常勤講師に委ねざるを得ないが、正規の教員ではないため自治体が主催する非常勤講師向けの研修はほとんどない。非常勤講師はサポートのないまま一人苦勞している現実がある。そのため、非常勤講師への支援に重点を移していく必要性を強く感じた一年であった。

②研究・調査とその公開

【内容】

当財団が実施している教育、実施した教育の成果をホームページなどで公表し、教員等が活用できるようにする。

【結果】

ア) 帰国外国人児童生徒用「日本語教材」の公開

前述のように研修に参加できない非常勤講師がおり、それらの教員からの問い合わせが15件あった。数としては少ないが、その切実さは痛いほど伝わってきた。それらの相談に応じ、自主作成した教材を提供するとともに、指導に困っている内容に個別に応じた教材を作成し提供することも始めた。

また、直接アクセスしてこないが教材作成に苦勞している教員は多く、当財団のホームページ内に開設してある教材紹介へは1576のアクセスが記録された。

イ) 児童用「作文教材」の公開

当財団では、感想文が主体の日本の作文教育に一石を投じた「発信力UP教室」を開催していたが、その教室で開発した教材を、多くの教育関係者に利用してほしいと思い、令和2年度より教材の整理と公開を開始した。論理的な思考力に基づいた作文にするため、短い文章で事象を的確に表わすための力を養成する教材を公開した結果、694のアクセスがあった。

③本事業の今後

ア) 相談内容の幅を広げる

現在は幼児の成長を促す方向での相談が主流だが、深刻さの度合いからは人と関わる場面で問題が生じた子どもの相談のほうが重要であろう。今後は今までの保育・教育経験を元に、より深刻な問題を抱える親子への相談も積極的に応じていきたい。

イ) 帰国外国人児童生徒教育の支援対象の移行

前述のように、研修会・講演会のような多人数への一斉支援ではなく、学校の体制が不備、管理職の理解が得られない、非常勤講師で身分も不安定なおかつ教材購入の予算もあまり与えられていないといった悪条件の下で指導している教員への支援へと移行していきたい。今までより人数的には少なくなるが、実のある支援ができるものと確信している。

ウ) 公開の幅を広げる

現在は、児童生徒向け日本語教材や児童むけ作文教材の公開を行っているが、当財団では他にも幼児対象の教育を行っている。幼児なので教材の公開という訳にはいかないが、具体的な指導方法（指導案）の公開は可能である。今後は幼稚園では扱っていない領域の教育内容を公開することで、幼稚園や幼児教室での利用を目指すことも考えたい。

3. その他（地域社会への還元）

財団の事業としては位置づけていないが、必要に応じて次のような協力をした。

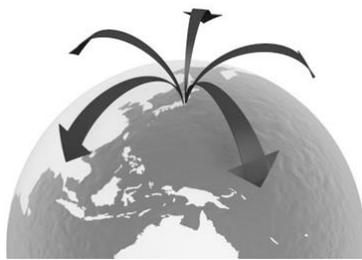
(1) 文化的活動の「場」の提供

【内容】近年、地域の人々の文化的活動が活発になってきているにも拘わらず、公民館などの公共の場の確保が難しくなっている。そこで、活動の場を無償または実費で提供することで、文化的活動のサポートを行う予定であったが、コロナ禍で全て中止となった。

(2) 震災時に避難する「場」の提供

【内容】耐震化を進め、震災時に地域の人々の避難場所となるようにする。

【結果】今後、予想される東京直下型の地震の時は、会員でも相当多くの帰宅困難者が出るほか、歩いて帰宅する一般住民が途中で帰宅を断念し、宿泊する場所を必要とすることも考えられる。そのような事態に対応できるよう毛布や食料などの備蓄量を増やす方向で検討を進めている。今年度は幸いにもこの協力をしなくてもすんだ。



Hatano Family School